

谷崎潤一郎

(二)

谷崎潤一郎
(二)

新潮社版



日本文学全集 9

谷崎潤一郎(二)

発行／1967年9月15日十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／東洋印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

細雪

上卷

中卷

下卷

注解
解説

伊藤
整

五

五

一八二

四〇五

六六三

六六七

谷崎潤一郎
(二)

細さこめ

雪ゆき

上 卷

一

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入はいって来た妙子たきこを見ると、自分で襟えりを塗りかけていた刷毛はけを渡して、其方そちは見ずに、眼の前に映っている長襦袢ながじゆばん姿すがたの、抜き衣紋えもんの顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子さちこはきいた。

「悦えつちゃんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、

雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子えつこに攔ふせまって、稽古けいこを見てやっているのであろう。悦子は母が外出する時でも雪子さえ家にいてくれれば大人おとなしく留守番をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃って出かけると云うので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げると云うことでどうやら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一つあるねんで」

「そう、——」

姉の襟えり頸くぼから両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉おしろいを引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆うづたかく盛り上っている幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見える。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。——」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七八十円、ボーナス入れて二百五十円ぐらいになるねん」

「MB化学工業云うたら、仏蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそう云うことには明るかった、そして案外世間を知らない姉達を、そう云う点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年嵩としかさのような口のきき方をするのである。

「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。」

——本店は巴里パリにあつて、大資本の会社やねんてなあ

「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」

「そうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、仏蘭西語出来はるのん」

「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちよつとぐ

らい行てはったことあるねん。会社の外ほかに夜学校の仏蘭西語の教師してはつて、その月給が百円ぐらいあつて、両方で三百五十円はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んではる昔の家屋敷と、自分が住んではる六甲ろくがの家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦ねんふで買うた小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」

「それでも家賃助かるよつてに、四百円以上の暮し出来るわな」

「どうやろか、雪子ちゃんに。係累けいらいはお母さん一人だけ。それから田舎に住んではつて、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみんなことには」

「先方はえらい乗り気やねん」

「雪あんちゃんの写真、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子（つるこ）がいるので、妙子は幼い頃からの癖で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼びならわしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まって「きあんちゃん」と聞えた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持って行かはってん。何やたいそう氣に入ってはるらしいねんで」

「先方の写真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞えているけはいなので、雪子が上って来そうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出（ひきだし）あけて御覧、——」

と、紅棒を取って、鏡の中の顔へ接吻しそうなおちょぼ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あった、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例に依（よ）ってどないも云わへん、『ああ此（こ）の人』云うただけや。こいさんどう思う」

「これやったらまあ平凡や。——いや、いくらかええ男の方か知らん。——けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ」

「そうかて、それに違いないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにええことがあるで。——仏蘭

西語教（が）せてもらえるで」

顔があらかた出来上ったところで、幸子は「小槌屋呉服店」と記してある畳紙（たたし）の紐を解きかけていたが、ふと思いついて、

「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行って、注射器消毒するように云うといてんか」

脚氣は阪神地方の風土病であるとも云うから、そんなせいかも知れないけれども、此処の家では主人夫婦を始め、ことし小学校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋にかけて脚氣に罹り罹りするので、ヴィタミンBの注射をするのが癖になってしまつて、近頃では医者へ行く迄もなく、強力ベタキシンの注射薬を備えて置いて、家族が互に、何でもないようなことにも直ぐ注射し合つた。そして、少し体の調子が悪いと、ヴィタミンB欠乏のせいにしたが、誰が云い出したのか

そのことを『B足らん』と名づけていた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行ったが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよっと、誰か」

と、声高に呼んだ。

「——御寮人さん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや」

二

井谷と云うのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セッットに行った時に、「ちよっと奥さん、お茶に付き合って下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めて此の話をしたのである。実はこちらへ御相談をしないで悪かったけれども、ぐずぐずしていて良い縁を逃がしてはと思ったので、お預かりしてあったお嬢様のお写

真を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半程も前のことになる。それきり暫く音沙汰がなかったもので、自分は忘れかけていたのであったが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行って尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何も彼も知っていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだと云うことはわざわざ新聞社まで行って調べて来ているくらいなので、よく諒解していたけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになって御覧なさいと云って、納得が行くように説明はしておいた。先方は謙遜して、蒔岡さんと私とでは身分違いでもあり、薄給の身の上で、そう云う結構なお嬢様に来て戴けるものとも思えないし、来て戴いても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお気の毒のようだけれども、万一縁があつて結婚出来るならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみてもほしいと云っている。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしていたと

かで、現に家屋敷の一部が郷里に残っていると云うのであるから、家柄の点ではそう不釣合でもないのではあるまいか。お宅さんは旧家でおありになるし、大阪で「時岡」と云えば一時は聞えていらしたに違いないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつ迄もそう云う昔のことを考えておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかがであらうか。現在では月給も少いけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないことはないし、それに日本の会社と違つてわりと時間の余裕があるので、夜学の受持時間の方をもつて殖^殖やして四百円以上の月収にすることは容易だと云っているから、新婚の所帯^{しよばい}を持つて女中を置いて暮して行くには先ず差^さ支^しえあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中学時代の同窓で、若い時からよく知つているので、太鼓判を捺すと云つてゐる。そう云つてもお宅さんの手で一往^{いっ}お調^{てう}べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのためで外に理由はないと云うのが、矢張^{やぢやう}ほんとうらしく思える。それは巴里にも行つていたのだし、四十

を越してもいることだから、まるきり女を知らない筈はないだらうけれども、自分が此の間會つて見た感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知つていそうな様子は微塵^{みじん}もなかった。器量好みなどと云うことは、得てそう云う堅人^{かたじん}によくあるものだが、その人も巴里を見て来た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合わなくてもよい、しとやかで、大人しくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立も勿論だけれども、第一に手足のきれいな人がほしいと云う注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけだと思ふのであるが、——と云うような話なのであった。

長らく中風症で臥^ふたきりの夫を扶養しつつ美容院を経営して、かたわら一人の弟を医学博士にまでさせ、今年の春には娘を自由^{めいじう}に入学させたと云うだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭腦の廻転が速く、万事に要領がよい代りに、商売柄どうかと思われるくらい女らしさに欠けていて、言葉を飾るような廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剝^むき出しに云つてのけるのであるが、その云い方がアクドクなく、

必要に迫られて真実を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を与えることがないのであった。幸子も最初、井谷がいつもの急き込むような早口でしゃべるのを聞いてみると、随分此の人とは思ふところもあったけれども、段々聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な気象から好意で云ってくれていることがよく分るし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけて来られるので、ぐっと俯伏せに取って抑えられてしまった感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、又此方でもその人の身元を調べるだけは調べさせて戴いてと、その時はそう云って別れたのであった。

幸子の直ぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸してもう三十歳にもなっていることについては、深い訳がありそうに疑う人もあるのだけれども、実際は此れと云うほどの理由はない。ただ一番大きな原因を云えば、本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪奢な生活、時岡と云う旧い家名、——要するに御大家であった昔の格式に囚われていて、その家名にふさわしい婚家先を望む結

果、初めのうちは降る程あった縁談を、どれも物足りないような気がして断り断りしたものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が一層衰えて行くと云う状態になった。だから「昔のことを考えるな」と云う井谷の言葉は、ほんとうに為めを思つた親切な忠告なので、時岡の家が全盛であったのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。いや、もっと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末頃には、生活の上にも営業の上にも放縦であった父の遣り方が漸く祟つて来て、既に破綻が続出していたのであった。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行われ、次いで旧幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るようになったが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の倅をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであった。

女の子ばかりで男の子を持たなかった父は、晩年に隠

居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎えて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろそろ結婚期になりかけていたのに、とうとう父の手で良縁を捜して貰えなかったこと、義兄辰雄との間に感情の行き違いが生じたこと、などにもあった。

いったい辰雄は銀行家の倅で、自分も養子に來る迄は大阪の或る銀行に勤めていたのであり、養父の家業を受け継いでからも實際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反対を押し切つて、まだ何とか踏ん張れば維持出来たかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家來筋に當る同業の男に譲り、自分は又もとの銀行員になった。それと云うのは、派手好きな養父と違い、堅実一方で臆病でさえある自分の性質が、経営難と闘いつつ不馴れな家業を再興するのに不向きなことを考え、より安全な道を選んだ結果で、当人にすれば養子たる身の責任を重んじたからその処置なのであるが、雪子は昔を恋うるあまり、そう云う義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難しているであらうと思つていた。と、ちょうどその時分、――父が死んで間もない頃、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすすめた口があった。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしている男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になっている関係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知つてゐると云う訳であつた。そして豊橋の三枝家ならば格式から云つても申分はないし、現在の蒔岡家に取つては分に過ぎた相手であるし、本人も至つて好人物であるからと、見合いをするまでに話を進行させたのであつたが、雪子はその人に會つて見て、どうにも行く氣になれなかつたのであつた。と云うのは、別に男振がどうかと云うのではないが、如何にも田舎紳士と云う感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしていた。聞けば中学を出た時に病氣をしたとかで上の学校へは這入らなかつたと云うのであるが、恐らく學問の方の頭は良くないのであらうと思うと、女学校から英文專修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さきざきその人を尊敬することが出来そうもない懸念があつた。それに、

いくら資産家の跡取で生活の保証はあるにしても、豊橋と云うような地方の小都会で暮すことは淋しさに堪えられない気がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀そうなことがさせられるものかと云ったりした。義兄にしてみれば、義妹は学問はよく出来たかも知れないけれども、少し因循過ぐるくらい引込み思案の、日本趣味の勝った女であるから、刺戟の少い田舎の町で安穩に暮して行くのには適しているし、定めし本人にも異存はあるまいと極めてかかったのが、案に相違したのであったが、内気で、含羞屋で、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけに依らない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹なかの中ではつきり「否」にきまつてゐることなら、早くそう云えばよいものを、どうとも取れるような生返事ばかりしていて、いよいよよとなつてから、それも義兄や上の姉には云わないで、幸子に打ち明けたのは、一つには余りにも熱心な義兄の手前、云い出しにくかつたせいもあるうが、そう云う風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつ

た。そのために義兄は内心否でないものと感違ひをし、先方も見合ひをしてからは、急に乗り氣になつて是非にと懇望して来ると云う訳で、話は退つ引きならない所まで進んだのであつたが、一旦「否」の意志表示をしてからの雪子は、そうなると義兄や上の姉が代る代る口を酸くして頼むようにして勧めても、最後まで「うん」と云うことを云わないでしまった。今度は泉下の養父にも喜んで貰えると思つてかかつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に対し、仲に立つて斡旋してくれた銀行の上役の人に対し、今更挨拶のしようがなくて冷汗の出る思いをしたこと、——それも、尤もに聞える理由があるならばだけでも、顔が知的でないなどと下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありそうにもない勿体ない縁を嫌うと云うのは、ただ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやろうと云う底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかつた。

それから此方、義兄は雪子の縁談には懲り懲りした形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾ける

けれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、出来れば避けたいと云う風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に
出た「新聞の事件」と云うものがあつた。

それは今から五六年前、当時二十歳であつた末の妹の妙子が、同じ船場の旧家である貴金屬商の奥畑家の倅と恋に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむずかしいと見て、若い二人がしめし合はして非常手段に出たもので、動機は真面目であるらしかったが、執方の家でもそんなことは許すべくもなかったので、直きに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかの如くであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまった。而も妙子を間違えて、雪子と出、年齢も雪子の年になつていた。當時岡家では、雪子のために取消を申し込んだものか、但しそうすれば半面に於いて妙子がしたことを裏書きす

るのと同じ結果を招く恐れがあり、それも知慧のない話であるからいつそ黙殺してしまつたものと、当主辰雄が散々考えたのであつたが、過ちを犯した者はどうあろうとも、罪のない者に飛ばつちりを受けさせて置く訳には行かぬと思つたので、取消を申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消ではなく、正誤の記事で、予想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いて見るべきであるとは心付いていただけでも、聞いたところで取り分け自分に対して口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれそうもないことは分つていたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間が紛糾することもあらうと考へ、妻の鶴子に話ただけで、自分一人の責任でそう云う手段に出たのであつたが、正直のところに云えば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことに依つて雪子によく思われたいと云う底意が、いくらか働いていたかも知れない。それと云うのが、養子の辰雄には、大人しいようでその実いつまでも打ち解けてくれない雪子と云うものが一番氣心の分らない扱いにくい小姑なので、こんな機会に彼女の機嫌を取り

たかったこともあるう。しかしその時も当てが外れて、雪子も妙子も彼に悪い感じを持った。雪子に云わせれば、新聞に間違った記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消などと云うものはいつても人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私達としては、取消にせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そっと黙殺してしまうのが賢かったのだ、兄さんが私の名誉回復をしてくれるのは有難いけれども、そうしたらこいさんはどうなるであらう、こいさんのしたことは悪いには違いないが、年齒も行かない同士の無分別から起ったこととすれば、責められてよいのは監督不行届な両方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんは勿論私にだって一部の責任がないとは云えない、そう云っては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知っていてくれると信じているので、あのくらしい記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思っていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなったらどうするか、兄さんのすることは万事理窟詰めで、情味がな

い、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに実行するとは専横過ぎる、——と云うのであったが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てて上げるのは当り前だけれども、私の名を出さないでも済ませる方法もあったらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまうことが出来たらうものを、兄さんはそう云う場合にお金を吝しむからいけない、——と、此れはその時分から云うことがませていた。

辰雄は此の新聞の事件の時、世間に合わす顔がないと云って辞職願を出した程であった。尤もその方は「それには及ばぬ」と云うことで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何としても償いようがなかった。たまたま幾人かの人は、正誤の記事に気が付いて彼女の冤罪を知ったでもあらうが、彼女は潔白であったにしても、そう云う妹娘のある事実が知れ渡ったことは、姉娘を、その自負心にも拘らず、いよいよ縁遠くする原因になった。ただ、雪子自身は内心は兎に角、表面は「それくらいなことでは傷つきはしない」と云う建前でしたので、そんな事件のために妙子と感情が齟齬す